

二つのナルシズム

——トーマス・マンと三島由紀夫——

林 進

—

トーマス・マンは或るエッセイの中で「イロニーはほとんどいつも、苦境から優越をつくることを意味する」（九五六）と言っているが、とくにマンの初期短篇小説群の人物に見られる「嘲笑としてのイロニー」¹は、傷つきやすいナルシスの武器となっている。たとえば『ヴェルズングの血』の兄妹の毒舌性は、「生来の防御癖」（八一—三八二）と嘲笑癖を示しているが、このイロニーの心理的モチーフはナルシズムの孤立ないし接触不安にほかならない。オウィディウスの語る神話のナルシスも、エコーに抱擁されようとしたとき、「手を放すのだ！抱きつくのはごめん²！」と叫ぶ。概してナルシスは、「時代の干渉」や他者の要求に対して「身をまもり、自己の世界の純粋性を維持しようとする」³が、イロニーはそのための武器となる。

三島由紀夫の主人公も、イロニーという武器をもって、自己の世界の純粋性を維持しようとする孤独なナルシスを示している。たとえば初期短篇『詩を書く少年』に表現されているものは、「人生を体験する以前に人生を知的に認

識」してしまつた者の人生に対する「シニカルな態度」であるが、他の三島由紀夫の主人公の多くも、神話のナルシズと同様、他者への愛による自我喪失を恐れてのことか、距離をつくるイロニーで武装している。『仮面の告白』の「私」は、汚穢屋や不良少年やくゞへの強烈な憧れを抱くが、それでも彼らはいくまで憧れの対象にとどまり、自分を棄てて彼らの領域には入りこむことはない。『愛の渇き』の悦子は、三郎を愛しながらも、愛による救済を拒否して最後には三郎を殺す。「私」も悦子も愛と孤独という逆説、愛を渴望しながら愛されることから遁走する逆説を生きている。

ちなみに神西清は『ナルシシズムの運命』のなかで三島由紀夫のナルシズムを「否定に呪はれたナルシシズム」、「自己陶醉を拒絶されたナルシシズム」と呼んだが、それをたとえば「イロニーを含んだナルシシズム」とでも言いかえるならば、三島のナルシシズムはトーマス・マンのそれにかなり近似してくる（ただし三島のナルシシズムのほうがより「否定に呪はれ」、「自己陶醉を拒絶され」ている）ように思われる。

二

ところで、トーマス・マンのナルシシズム及びイロニーの理論的裏付け、あるいは再認識にフロイトが大きな役割をはたしている点は見逃せない。まずナルシシズムについていえば、マンがフロイトの『ナルシシズム入門』（初出は一九一四年）を初めて知つたのは、一九二五年にフロイト全集が出たときだと推測されている。マンが『ナルシシズム入門』にいかにか驚き、感動したか、それを示す強調下線がマン所蔵の論文の数個所に引かれているとこのことである。イロニーについていえば、マンがフロイトに関するエッセイや講演論文で言明しているのであるが、マンにとつてフロイトの精神分析学の本質は「メラ・ン・コリク・ク・な認識」（一一一七四八）にあった。これは、マン自ら確信しているように、イロニーとしてマンの創作の一つの原理となつた。

フロイトのナルシズム理論は、マン文学に容易に關係づけられるが、その際一応考慮に入れておくべきことは、マンの初期作品の場合、時間的にいつてフロイトのナルシズム論の影響ということは考えられないこと、にもかかわらずフロイトが臨床の症例や文学作品等から導きだしたナルシズムのモデルに近似した多くの点が見られることである。たとえば、初期短篇小説の主人公の多くはフロイトのナルシズム理論という対象リビドーの挫折現象をあらわしている。彼らは宿命的な自己愛から逃れて対象愛を求めるが挫折する。一方マンの後期作品においては、ナルシズムの愛の不能性のために破滅する人物というより、むしろフロイト流に自己愛を理想我に向けることによってナルシズムを超越し、それを人類愛へと高めるといったような人物が描かれることのほうが多い。ゲーテ、ヨゼフ、グレゴリウスはそれぞれ「人類の詩人」、「養う人」、「いとも偉大な教皇」となる。さらには、理想我や人類愛とは程遠い「詐欺師」フェーリクス・クルルといったような人物も描かれるが、この主人公の自惚れ、自己愛への強烈な信仰告白の中にも、ナルシス神話と併せてフロイトへの關係に富んだ暗示を見ることが出来る。

『フロイトと未来』という講演論文のなかでトーマス・マンが自ら述べているように、マンが後にフロイトの精神分析学に興味をもつようになった要因は、ニーチェのイローニッシュな心理学に求められる。マンの小説『トニーオ・クレイガー』の「心理的鋭敏さ」、「認識の嘔吐」はニーチェの「仮面を剥ぐ」心理学と結びついており、さらにマンのいう「受苦の道徳に規定された真理愛」すなわち「心理としての真理に対する愛」（九一四八一）もニーチェに由来している。この世の現実を懷疑し分析するマンのイロニーはだから、同時に又自己にも向かう、すなわち問題をすべて個人の心理へ、個人の精神的領域へ還元することによって「メラ・コリク・な認識」となる。このときイロニーは、ナルシズムと同様、自意識の表徴ともなる。マンの描く人物のナルシズム的状况を際立たせているものはこの自意識に関わる「認識の嘔吐」である。『幻滅』の主人公は現実のすべてに幻滅するが、これは肥大しすぎた自意識からきている。『ヴェルズングの血』の兄妹は「悪臭を放つ俗世間」（八一三九四）を軽蔑し拒否するが、そ

の底にあるのは現実世界及び自己に対する「認識の嘔吐」にはかならない。ともあれ、マンの描くナルシスたちの自己陶醉の中には何らかの形でイロニーがあらわれるのである。

三

『旅の墓碑銘』の主人公の「巴里の春」についての感想は三島由紀夫のナルシズム観をよく表明している。

自分自身は何も感じないで、そのくせ人には理由のない酩酊を強いる不感症の春。鑑賞家の幸福をやすらかに満喫させてくれる春。万人の感じ易さに訴える抜け目のない春。この美しい古都が、彼女自身のナルシズムを利用していることの完全さと来たら！

このナルシズム観からして、三島のナルシズムはすぐに不感症ないし愛の不能性のテーマと密接につながってくる。このテーマを扱った三島作品としては『音楽』や『沈める滝』や『愛の渇き』などが挙げられる。これらの主人公は皆、他者との交渉を断られたナルシス的人間の苦痛を示している。『音楽』では近親相姦がモチーフとなっており、ヒロイン麗子の不感症が兄への愛情から、つまり兄のために他の男性を拒否したいという願望からきていることが明らかにされる。『沈める滝』では「石像」のように「無感動」な人妻と、不感症の女しか愛せない青年技師の関係が描かれる。しかしその人妻が「感動を知った女」に変貌した瞬間、青年の愛は失われる。ところで、この青年の愛を否定する試みは一方では、「愛の渇望」の逆説的表現と見做せるものである。小説『愛の渇き』の主人公悦子も不感症の女のイメージ、渇きのみがあってけっして満たされない絶望をあらわしている。

三島由紀夫は『私の遍歴時代』で「少年期と青年期の境のナルシズムは、自分のために何をでも利用する」と書

いているが、三島の描く愛の世界といえは、そのほとんどがナルシズムと関連した性的倒錯の世界といつてもよい。たとえば『春子』や『仮面の告白』や『禁色』では同性愛、『熱帯樹』や『音楽』では近親相姦が描かれているが、これらの倒錯的愛の背景にはナルシズムをみることができる。

トーマス・マンも自らの創作にナルシズムと関連したさまざまな性的世界を利用してゐる。マンの小説人物の多くは、他者への愛の不可能性のために滅びるか、あるいは愛せてもせいぜい自分と同等の者、自分とよく似た者しか愛せないが、それらの愛がしばしば形づくる同性愛や近親相姦（たとえば『トニーオ・クレイガー』、『ヴェニスに死す』、『ファウストゥス博士』等における同性愛、『ヴェルズングの血』、『選ばれし人』等における兄妹、母子の近親相姦）の背後にもやはりナルシズムが潜んでいる。

四

同性愛の問題は、三島由紀夫のみならず、トーマス・マンにおいても作家の実存にかかわる問題であつた。マン自身も同性愛の問題にいかにかきこたわりつづけたか、それは日記などを見ればわかるが、マンは一九三四年五月六日付の日記の中で、生涯における一連の同性愛的体験の時期を大きく三段階に分けている。¹⁰ 第一段階はリュールベックのギムナジウム時代の二人の学友との淡い経験である。第二段階はマンが二十代半ばにミュンヘンで知り合った青年画家との関係であるが、これは「思春期の性愛」¹¹、「心の根本的経験」¹²とマン自ら言っているように、マンのこの種の体験でもっとも激しいものであつた。第三段階は一九二七年における一人の若者に対する情熱である。マンはこれらのことを述べたあと、「そしてこの正常性によって私は、自分の人生が結婚や子供によってよりも、より強力に規範的なものなかに組み込まれるのを感じることができるといった、¹³ 一見驚くべき文章を記しているが、これはマンの作家的実存に即した発言として理解すべきであろう。さらにマンは六十歳のとき、上半身裸の植木屋を「大きな

喜びと感動をもって「観察するが、一方で「この嗜好の非現実性、幻想性」に言及し、「この嗜好の目標はどうやら観察し感嘆することであり、エロスに根ざしているものの、実現などということは、理性をもってしてはむろんのこと、感覚をもつてしてさえ夢にも考えていないものらしい」と記している。これがマン自身の全ホモエロティックに対する共通した態度であるかどうか、俄には断定できないが、ともあれ、マンのホモエロティックの体験は『ヴェニスに死す』をはじめとするマンの主要作品のほとんどに見て取れると言ってもよい。だから、野口武彦が言うように、三島由紀夫が『ヴェニスに死す』のうちに自己自身の劇を発見したこと、そして『仮面の告白』を受けついで『禁色』が『ヴェニスに死す』の主題を三島なりに変奏した作品だったということは十分考えられる。¹⁵

ところで、フロイトが初めてナルシズムの概念に言及したのは一九一〇年の『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出』の中であるが、これはダ・ヴィンチ自身の断片的回想を手がかりにして、彼の少年愛が、同性愛の形をとった自己愛であることを明らかにしたものである。(ついでに言えば、三島は『フロイト「芸術論」』のなかで『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出』について「一説の価値があらう」と書いている。)フロイトは同性愛とナルシズムとの親近性に関して『精神分析入門』の「リビドー理論とナルシズム」の章でも「同性愛的対象選択は、異性愛的対象選択よりもナルシズムに近い。だから不都合なほど強くなった同性愛的衝動を拒否しなければならなくなった場合、ナルシズムへと帰っていく道はとりわけ容易になる」というふうに述べている。¹⁷

同性愛とナルシズムといえば、奥野健男は三島由紀夫のナルシズムを偽物と言っている。それによれば、元来ナルシズムとは、自分以外のなものも憧れない、つまり他人をリビドーの対象にしない状態をいうが、しかし『仮面の告白』その他の作品から明瞭にうかがえるように、三島は体格の立派な若者をリビドーの対象にしている。

『禁色』の主人公、南悠一は絶対的な美を体現したナルシストとして設定されているが、その悠一は、ナルシストにも似合わず、三島と同じように他の美青年を求めてさまよいます。三島はナルシストと規定した主人公に自分と同じ

性願望をあてた。つまり、三島はナルシストを装っているが実は同性愛者なのだということである。¹⁸

このように三島由紀夫について男色家、同性愛者ということがよく指摘されるが、フロイトのナルシズム理論からすれば、同性への対象愛のように見えたその対象も三島自身の分身、もしくは投影、そしてその愛は一種の自己愛と見做せる。したがって、『仮面の告白』の同性愛も、「自分の腋窩に「……」黒ずみつつある『近江と相似のもの』を愛する」と「私」が告白するとき、ナルシズムと同義となる。ちなみに神西清は三島のナルシズムを「男色といふ分裂型ナルシズム¹⁹」と呼んでいる。もしかして、野坂昭如が言うように、「自分しか愛せない人間に、同性愛も異性愛もあつたものではない²⁰」というのが実情かもしれない。

五

近親相姦とナルシズムとの関連は、有名なオイディプスの『変身物語』とは別のもう一つのナルシス神話が示している。それによると、ナルシスには双生児の美しい妹があつた。しかしその妹は死んでしまう。ナルシスは妹の死を自ら慰めるために泉の辺に座り、水面に映る妹によく似た自分の姿を見つめているうちに死ぬ。²¹このもう一つのナルシス神話は、兄妹愛とナルシズムとの近似性を示唆している。また、フロイトが『性に関する三つの論文』のなかで「ナルシズムから出発して彼らは自分に似た若者、彼らの母親が自分を愛したように自分が愛せるような若者を探すことになる²²」と、同性愛を論じながらナルシスと母との固着に言及するとき、ナルシズムは同性愛ばかりでなく、さらに近親相姦にも関係してくる。ちなみに、そのフロイト論文のいうナルシスと母との固着に注目した野島秀勝は、ナルシスとオイディプスとを結びつけて「『母が自分を愛したように』自分が自分を愛するナルシズムとは、オイディプスの近親相姦の代償行為ではないだろうか。とすれば、ナルシスとはリビドーを『母』に向けてる代りに自分に向け自閉させることによって、禁忌の違反を未然に回避した挫折した、出来損いのオイディプスというこ

とにならないか」というふう述べている。

三島由紀夫には一人の妹がいたが、その妹は昭和二十年十月、終戦の年の秋、十七歳で亡くなっている。「私は妹を愛してゐた。ふしぎなくらゐる愛してゐた。『……』妹は腸出血のあげくに死んだ。死の数時間前、意識が全くないので、『お兄ちやま、どうもありがたう』とはつきり言つたのをきいて、私は号泣した」と、『終末感からの出発』で三島は書いている。こうした体験から三島が兄妹愛のモチーフに強く惹きつけられたということは十分考えられる。たとえば『音楽』は兄妹愛をモチーフとし、兄のために他の男性が愛せない若い女の不感症に対する精神分析のプロセスを語っている。戯曲『熱帯樹』でも兄妹愛がナルシズムやオイディプスの母子愛と絡まされて描かれている。この作品に関して村松剛は「『熱帯樹』には母と息子との異様な関係といい、兄妹間の愛情といい、三島自身の経験した家庭環境のある面が——むろん極度に誇張されて——反映しているのかもしれない」と書いている。三島自身は「『熱帯樹』の成り立ち」で「それはさうと、肉欲にまで高まつた兄妹愛といふものに、私は昔から、もつとも甘美なものを感じつづけて来た。これはおそらく、子供のころ読んだ千夜一夜譚の、第十一夜と第十二夜において語られる、あの墓穴のなかで快樂を全うした兄と妹の恋人同士の話から受けた感動が、今日もなほ私の心の中に消えずにゐるからにちがひない」と記している。

兄妹愛のモチーフに強く惹きつけられた点ではトーマス・マンも三島と同じであるが、さらにその原因が自身の生活体験に求められるという点でもマンは三島によく似ている。女優を志し挫折したマンの妹カルラは、一九一〇年七月三十日に青酸カリを飲んで自殺したが、これはマンにとって想像以上の打撃であった。この事件の後マンは兄ハインリヒ宛ての手紙に「私にとってこれ以上辛いことはありません。私の兄妹の連帯感情からすれば、カルラがとつた行動によって私たちの存在が疑問視され、私たちを繋留するものが弛められてしまったと思わざるをえません。『……』そうするとき彼女は、私たち兄妹の連帯感を、共通の運命に結ばれた存在だという感情を失つていたので

す。彼女は、いわば、一種の暗黙の協定に違反して行動をしたのです」(一九一〇年八月四日付)と書いています。同業者ともいふべき女優カルラの自殺はマン自らの芸術家ないし作家的実存を危うくするような事件であったといえる。マンには芸術家は病氣とか死に近い種族であるという考えがあるが、いみじくもこのようなマンについて三島は『わが魅せられたるもの』のなかで「トーマスマンが市民的なもの(ビュルガリツヒと言つてゐるが)にあれほど関心を持つのは、トーマスマンの中に破壊への衝動がうんと強いからだと思はれる」というふうには指摘している。ともかく、上記の手紙には「兄妹の連帯感」、「共通の運命に結ばれた存在」といった兄妹の結びつきを強調する表現が目立っている。マンは後の回想記『略伝』でも妹の自殺に触れているが、ここでは兄妹の関係を「運命共同体」(一一一—一二一)と表現している。これらの表現からマンが兄妹の結びつきにいかにかかわっていたかがうかがえる。妹の自殺はだからマン自身における一種の外傷的体験であつたともいえる。

『選ばれし人』はナルシズムと兄妹愛とオイディプスの母子愛が絡み合つた作品であるが、トーマス・マンはこうしたナルシズムの性的倒錯の秘密のなかに、人間のあらゆる可能性の徹底的究明を求める。インツェストから誕生したことをまだ知らない『選ばれし人』のグレゴリウスは「私の素性は秘密なのだ。私自身が一つの秘密なのだ。しかし秘密というものは一切の願望や希望や予感や可能性を盛つた器なのだ」(七一—一〇五)と自らの自己究明の旅にでる。ところで、『選ばれし人』のほかに近親相姦を真正面から取り扱つたマンの作品には『ヴェルズングの血』があるが、この背後にも絶えずナルシズムのテーマが見え隠れしている。『ヴェルズングの血』の兄妹愛は、兄ジョーグムントが妹ジョークリンデと結ばれる最後の場面で「君は僕をつくりだ」(八一—四一〇)と言うように、自分の似姿をした者同士によるナルシズム的な愛の世界への後退、いわばデカダンスとして描かれている。晩年の作品『選ばれし人』ではどうか。兄ヴィリギスと妹ジビュラは、『ヴェルズングの血』の兄妹と同様、いつも手をつないでおろし、彼らは相手のなかにナルシシ的に「私の可愛い対等の自我」(七一—三七)しか見ない。このような「同じ生まれ」

の者への愛は、根本において自己愛と変わりない。このナルシズム的近親相姦のモチーフがオイディプスの神話と結びついて『選ばれし人』では繰り返される。兄妹を両親にして生まれたグレゴリウスは母ジビュラと「同じ生まれの欲喜」(七一・二五三)に酔いしれる。母は息子の恋人となり、妻となる。しかし、この小説では犯した罪を知った主人公に、極端な贖罪行為のあと恩寵がもたらされる。グレゴリウスは「いとも偉大な教皇」(七一・二四六)となる。『ヴェルズングの血』の近親相姦が自閉的デカダンスに終始したのに対し、四十年余りを経て書かれた『選ばれし人』のそれはいわばユートピア的生への突破口となる。²⁶

六

トーマス・マンは講演論文『ゲーテとトルストイ』の中で「自己自身への愛はいつも小説的人生の始まりである」というゲーテの言葉を引用しているが、すぐこのあと「それに付け加えて、自己愛は又あらゆる自叙伝の始まりだということができる。というのは、己れの人生を書き留め、己れの成り行きを明示し、己れの運命を文学的に讚美し、同時代と後代とのこれに対する関心を熱烈に要求する人間の衝動は、自我感情の非凡な活発さを前提とするからである」(九一・六九)と言って自己愛をとくに自叙伝と結びつける。少なくともマンの詐欺師小説の自叙伝作家クルルは「己れの人生を書き留め、己れの成り行きを明示し、己れの運命を文学的に讚美」するナルシスを示している。しかしもちろん『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』は単に形式的な、つまりクルルだけに関わる自叙伝ではない。マン自身の自伝でもある。マンはこの小説において「彼の他のあらゆる芸術家小説よりもずっと直接的に自分を見せている」²⁷のである。この意味でまた『クルル』は、マン自身のナルシズム的なものをも含んでいるともいえる。ところで、言葉の問題は『クルル』のなかで大きなウエイトを占めているが、マンの言葉への惚れ込みは明らかにマン自身のうちなるナルシスのあらわれである。自己に恋した若者の像は、マンのゲーテ小説『ワイマルのロッ

「テ」にも登場するが、そこでのナルシス像は、自叙伝を越え出て詩文学全般の象徴となっている。

詩というものは何らかの方法で自分の姿を鏡に映して見惚れるという傾向があつて、これは自分自身の美しい姿を映してその上に恍惚としてかかみこんでいる少年、という古代の可愛らしい譬喩を連想させます。「……」美しいものが、詩が、どうして自惚れていけないわけがありませんか。詩はもつとも悩ましい情熱に陥る場合でさえ自惚れます。(二一四六七)

ヴィスリングは、トーマス・マンが創作する際感じていたものをハインツ・コフトのナルシズム論がいう「大洋のような広大な感情」で説明する。つまりマンは、「根源的魂の宇宙、すなわち母の原初的経験」が「おりにふれて茫漠とした余韻の形で想起」された「大洋のような広大な感情」のなかで、世界の言語化へと駆り立てられ、これでもって母の胎内で、あるいは眠りのなかで経験した「ナルシスの万能性」を求めるとしている。²⁸コフトのナルシズム論の特徴は、ナルシズムのもっている創造的原動力の面を積極的に打ち出した点にあると思われるが、ヴィスリングはここでさらにコフトのいう「宇宙的ナルシズム」という拡大され、変形された、すなわち個人の眼界を越え、世界の無限性と無常性を理解したナルシズムの概念を導入し、そこから『詐欺師フェリクス・クルルの告白』を「ナルシズムの新しい形式」の書として解釈する。²⁹とりわけ、主人公にして語り手クルルのナルシズムが世界愛に、マンの言葉でいえば「汎エロティシズム」(二一七〇五)に結びつくとき、この小説はマンにおける芸術創造の秘密を明かすものとなる。

トーマス・マンが自らのナルシズムを創作の世界に生かそうとするとき、それはエロスと結びつく。ナルシズムとエロスとの相補的關係といえ、マンは創作ノートに「自我は一つの課題である。自己欲と世界欲、自己中心

主義と拡張的情熱との併存³⁰と書き留めている。このナルシズム的限定とエロスの限界超脱、自己愛と世界愛との間にある緊張がマンの作品には常に存在している。マンはエッセイ『ミケランジェロとエロティシズム』で「美への耽溺、惚れ込みと想像力との連帯」（九―七九三）を言っているが、このことは、『ヴェニスに死す』における作家アシエンバハが美の化身タツジオを目の前に散文スケッチする場面に具体的に描かれている。ここにはナルシズムと同性愛的エロス、そして想像力との連帯がみられる。

初老の作家は、日覆いの下の粗末な卓に腰掛けて、偶像を眼前に、その声の音楽を耳底に、タツジオの美に従って自分の小文を、あの精選された一ページ半の散文を書いたが、彼はこの危険で甘美なときほど、文を作ることの醜翻味を、そしてエロスが言葉のなかに存在するのを感じたことはなかった。（八一四九二以下）

七

三島由紀夫におけるエロティシズムは、バタイユの理論が引き合いにだされて、とくに死と関連させて考察されることが多い。たとえば『憂国』における死による愛の完成や『春の雪』における、宮家との結婚に勅許が下った聡子を恋するという絶対不可能の禁忌の侵犯はバタイユの死のエロティシズムと結びつけられる。三島自身もバタイユのエロティシズム論を紹介しているが、それには「生の本質は非連続性にあるといふ前提から出発する。個体分裂は、分裂した個々の非連続性をはじめのみであるが、生殖の瞬間にのみ、非連続の生物に活が入れられ、連続性の幻影が垣間見られる。しかるに存在の連続性とは死である。かくてエロチシズムと死とは、深く相結んでゐる」（『エロチシズム』）と書かれている。三島は現代のニヒリズムをバタイユのいう「生の非連続性」の明確な意識として考える。それは世界とか他者との断絶感とも言い換えられる。たとえば『青の時代』の主人公は夜の街を群衆にもまれ

て歩きながら、「子供のときから、僕はこういう具体性と無縁な存在だった」と、群衆との隔絶を思う。ここには同時に又主人公の、ナルシズム的な「硝子の壁」を壊して世界の具体性に、他者に直接触れたいという「連続性」への意志が感じとれる。では三島自身が他者とか具体的な世界に直接触れるためにとった手段は何か。ボディビル、ボクシング、剣道などのスポーツである。これらは皆遅い肉体形成のための手段であるが、その動機は「連続性」への意志である。

『芸術にエロスは必要か』はいわばトーマス・マンの小説『トニーオ・クレイガー』についてのエッセイであるが、この中で三島由紀夫は芸術家を「生まれながらに欠乏の自覚」をもつ「エロスの申し子」と定義している。三島はまた『私の遍歴時代』にも次のように書いている。

私に余分なものといへば、明らかに感受性であり、私に欠けてあるものといへば、何か、肉体的な存在感ともいふべきものであつた。すでに私はただの冷たい知性を軽蔑することをおぼえてゐたから、一個の彫像のやうに、疑ひやうのない肉体的存在感を持った知性しか認めず、さういふものしか欲しいと思はなかつた。それを得るには、洞穴のやうな書齋や研究室に閉ぢこもつてはだめで、どうしても太陽の媒介が要るのだつた。

問題は肉体の欠如、そして肉体と精神の調和である。三島自身、「欠乏の自覚」からいかなる行動をとってきたのか、とくに『仮面の告白』以後、明瞭に示している。『仮面の告白』において「他者」としての強い男性的イメージへの主人公の憧憬が表現されるが、作者の三島自身は小説的フィクションの世界での表現（たとえば『鏡子の家』におけるナルシストの俳優舟木收はボディビルによって「彼であつて彼ではないもの」、「……」即ち見事な輝やかしい筋肉」を身につける）にとどまらず、ボディビルややくざ映画でのパフォーマンスなど、「言語による虚構の構築

からはみ出て、身体的表現による虚構世界の構築³¹をはじめ。『他者』として『仮面の告白』の主人公のエロスの対象でもあった「紺の股引を穿い」た若者や近江の遅い肉体が、ボディビルや剣道によって三島自身のものになる。このように愛されるものに自分自身もなるというのは、ナルシズムの自己充足性を表わすものであるが、しかしまた一方で三島の醒めた意識は自分の行動をイローニッシュに「私は私のやつてゐることが一場の喜劇にすぎず、小説家がボクシングをやつてゐる姿はやはり漫画的であり、私の理想世界は夢にすぎないことを知つてゐる」（『ボクシングと小説』）と言う。つまり、三島にとって、意識的、人工的に鍛えあげた自らの肉体は、やはり文字どおりの「他者」であり、精神と肉体の乖離は避けられない。

トーマス・マンの場合、「言語による虚構の構築」からはみ出るといふことは、（少なくとも三島のとつたような行動という意味では）ほとんどなかったといつてよい。マン自身が讚美した肉体というのも、自然な肉体であつて、無理矢理人工的に鍛えあげた肉体ではなかつた。だからマンは、美しい肉体を讚美し、精神と肉体の調和を理想としたものの、自らはボディビル、その他のスポーツによって肉体を造ろうとはしなかつた。マンは精神と肉体の調和を自ら創造する小説作品の中に求めることに甘んじた。たとえば、自伝的形式の小説『クルル』において、美しく表現する語り手と美しく表現される主人公とを、精神の美と肉体の美とを、クルルという一人物のなかで統合し、一つのユートピア的状况を実現している。ついでに言えば、「見る才能」をもつた「美の立像」（七一四四四）のクルルは、三島由紀夫が『ナルシズム論』でいうナルシズムが成立する条件を満たしているように見える。三島はナルシズムが成立する基本的要素として「絶対的美貌」と「自意識の絶対的客観性」をあげている。すなわち「ナルシスは己れを知つてゐなければならず、自己批評の達人でなければならず、そしていかなる容赦ない自己批評も破砕できないほどに美しくなければならぬ」としている。ところが、そのクルルの自意識はどうしても他者の賞讃を必要としているが、その点も「他人こそ『物言ふ鏡』であり、その賞讃こそ、肉体を離脱した非在の観念としての自意識

の、何ら目に見え手にとることのできない絶対的客観性を、傍証してくれるからである」という三島の言葉で説明される。

八

三島由紀夫は『小説家の休暇』のなかで「純然たる芸術的問題も、純然たる人生的問題も、共に小説固有の問題ではない」「……」小説固有の問題とは、芸術対人生、芸術家対生、の問題である。今世紀にあつてトオマス・マンが代表的作家であるゆえんは、この問題をとことんまで追究したからだ」と記しているが、トーマス・マンが三島由紀夫に与えた影響というのは、結局その「芸術と生活の二元論」³²（三好行雄との対談『三島文学の背景』）ということに帰着するのもかもしれない。それを具体的に言えば、おそらく、三島が石原慎太郎との対談（『新人の季節』）で言っているように、「芸術家というものを隠すというようないきかた」³³ということになる。三島は「裸体と衣装」のなかで芸術家を詐欺師と考えるマンの『トニーオ・クレーガー』について触れているが、この小説には「芸術家って奴は内面的にはいつも相当ないかさま師ですからね、うわべだけは、仕方がない、服でもきちんと整えているべきなんですよ、そうして尋常な人間なみに振舞わなくてはいけないんです」（八一―二九四以下）といった個所がある。マンがこの意識を生涯もちつづけたことは、マンが詐欺師小説『クルル』に、『トニーオ・クレーガー』の頃に着想してから死の直前までの五十年間、何らかの形で関わり続けたところからもうかがえる。詐欺師クルルは「扮装」によつてしか、つまり「兵士となって生きる」のではなくて「兵士のように生きる」という意味で「比喩的に」（七一―三七二）しか現実と交渉をもたない。マンの「市民」の役割を表わす「銀行家」スタイルも現実と交渉するときの「比喩的」な様式であるが、これがマンの「芸術家というものを隠す」生き方となる。いうならばこれも現実における「身体的表現による虚構世界の構築」であろう。自己を表現しつつ隠し、芸術を表わして芸術家を隠す、これはマンと三

島の共通した点と云ってよい。『仮面の告白』はだから、三島流『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』であるともいえる。

『三島由紀夫 亡命伝説』の著者は、『仮面の告白』に始まる三島由紀夫の戦後の人生を「仮面」の生と見做し、「その二十二年後の自決によって幕を閉じられた三島のフィクショナルな戦後は、いわば日常生活からの亡命である³⁴」と云っているが、この自己を表現しつつ隠す生き方は、ナルシスの生き方でもある。

ナルシスは他の人間に「理解」され「とらえ」られることを拒否する。「……」他人から「理解」されないためには、彼は他人の眼をくらまさないなければならない。彼は敢えてさまざまに自分を演出し振舞わねばならない。ナルシスは鏡の前でひとり演技するだけではない、対人間関係において演技しつづけなければならない。ナルシスの呪われた宿業である。³⁵

「仮面」の生、「フィクショナル」な生は、現実への「絶望と幻滅」と表裏一体をなしている。三島由紀夫は『小説家の休暇』なかで「いよいよ生きなければならぬと決心したときの私の絶望と幻滅は、廿四歳の青年の、誰もが味はうやうなものであった」と書いている。磯多光一によれば、三島を作家たらしめたものは、「敗戦」によってもたらされた「不幸」以外の何ものでもない。すなわち、それは「『絶対に自殺できない不幸』であり、また世界そのものが意味を喪失して、のっぺらぼうな均質な存在に化してしまった状態の中で、ともかくも『現実の相対性』に耐えてゆかなければならない不幸³⁶」であった。トーマス・マンを作家たらしめたものも「幻滅」であり、死に共感しながら「自殺できない不幸」であり、『魔の山』の語り手のいうような、「何のために」という問いに対して「空しく沈黙しつづける」（三一五〇）時代そのものであった。この「現実の相対性」、いわばニヒリズムの時代に耐えていく

ためにマンや三島が生きた文学的人生というのが「詐欺師」的生、「仮面」の生、すなわち「フィクショナル」な生だったといえる。ただマンと三島が違う点を挙げるとするならば、それはマンがあくまで「銀行家」スタイルをまもり通したのに対し、三島はポディールによって「他者」としての筋肉をあえて身につけたという点、あるいはマンが八十年をかけて生涯を「成熟」させたのに対し、三島は「行動」によって「成熟」を拒否³⁷する生涯の閉じ方をしたという点であろう。

トキモノ Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt am Main 1974. 引用箇所は、本文中の括弧内に巻数と頁数を記した。訳文については、『トーマス・マン全集』（新潮社 一九七二年）を参考ないし借用した。

三島由紀夫作品については、主として新潮文庫を使用した。これに所収されていない場合は、『三島由紀夫全集』（全三五巻・補巻一 新潮社）、及び『三島由紀夫評論全集』（全四巻 新潮社）を使用した。

注

- 1 Ulrich Karthaus: *Zu Thomas Manns Ironie*. In: *Thomas Mann Jahrbuch Band 1*. Hrsg. von Eckhard Heffrich u. Hans Wysling, Frankfurt am Main 1988, S. 86.
- 2 オウイギイウス『変身物語(上)』（中村善也訳 岩波文庫 一九八一年）一一五頁。
- 3 Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien*. Bd. 5. Narzißmus und illusionäre Existenzform. *Zu den Bekenntnissen des Hochstaplers Felix Krull*. Bern und München 1982, S. 97.
- 4 磯田光一「恩寵とこの戦争」（『殉教の美学』第一章）『批評と研究 三島由紀夫』（白川正芳編 芳賀書店 一九七四年）所収 七〇頁参照。
- 5 神西 清「ナチシズムの運命」『批評と研究 三島由紀夫』（白川正芳編 芳賀書店 一九七四年）所収 一八頁。
- 6 Vgl. Wysling: a. a. O., S. 92f.

- 7 Vgl. Ebd., S. 93.
- 8 Vgl. Sigmund Freud: Zur Einführung des Narzissmus. In: Freud-Studienausgabe. Bd. 3. Frankfurt am Main 1969, S. 37-68. 「ナルシズム入門」『性欲論』(フロイト選集第五卷 懸田克綱訳 日本教文社 一九六九年)所収
- 9 村松 剛『三島由紀夫の世界』(新潮社 一九九〇年)二四五頁参照。
- 10 Vgl. Thomas Mann: Tagebücher 1933-1934, Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main 1977, S. 411f. (『エーペス・ペン日記 1933-1934』岩田行一 浜川祥枝 森川俊夫訳 紀伊國屋書店 一九八五年)
- 11 Thomas Mann: Briefe 1889-1936. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main 1979, S. 27.
- 12 Thomas Mann: Tagebücher 1933-1934, S. 412.
- 13 Ebd.
- 14 Ebd., S. 397f.
- 15 野口武彦「ペン・三島・ヴィスコンティ」『三島由紀夫と北一輝』(福村出版 一九八五年)所収 一七八頁参照。
Vgl. Wysling: a. a. O., S. 333. ヴィスリングはこの個所で、フロイトがナルシズムの概念に初めて言及したのは『性に関する三つの論文』第二版(一九〇九年)の脚注に於いてであることを指摘している。ただし、ここでは形容詞の narzistisch しか記されておらず、各詞の Narzissmus が記されるのは『ダ・ヴィンチ』論文が最初である。
- 17 Freud: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. In: Freud-Studienausgabe. Bd. 5. Frankfurt am Main 1969, S. 411. 「精神分析入門」(フロイト選集第二卷 井村恒郎、馬場謙一訳 日本教文社 一九六九年)
- 18 奥野健男「三島由紀夫論——にせナルシズムの文学——」『批評と研究 三島由紀夫』(白川正芳編 芳賀書店 一九七四年)所収 四〇—六九頁参照。
- 19 神西 清 前掲書 一九頁。
- 20 野坂昭如「赫奕たる逆光」(文藝春秋 一九八七年)一九一頁。
- 21 高津春繁『キリシマ・ローマ神話辞典』(岩波書店 一九六〇年)一七九頁以下参照。
- 22 Freud: Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. In: Freud-Studienausgabe. Bd. 5. Frankfurt am Main 1969, S. 56. 「性に関する三つの論文」『性欲論』(フロイト選集第五卷 懸田克綱訳 日本教文社 一九六九年)所収

- 23 野島秀勝「ナルシスの不安」『ユリイカ』(青土社 一九八〇年八月)所収 九四頁。
- 24 村松 剛 前掲書 二九七頁。
- 25 Thomas Mann / Heinrich Mann: Briefwechsel 1900-1949. Frankfurt am Main 1975, S. 89.
- 26 Vgl. Mechtild Curtius: Erotische Phantasien bei Thomas Mann. Frankfurt am Main 1984, S. 18.
- 27 Helmut Koopmann: Narziß im Exil. Zu Thomas Manns „Felix Krull“. In: Der schwierige Deutsche. Tübingen 1988, S. 146.
- 28 Vgl. Wyslasing: a. a. O., S. 306f. (『フット入門—自己の探求—』P・H・オーンスタイン編 伊藤洗監訳 岩崎学術出版社 一九八七年 一六四頁参照。)
- 29 Vgl. Ebd., S. 306-311.
- 30 Ebd., S. 98.
- 31 高橋和巳「自殺の形而上学」『文藝読本』(河出書房新社 一九七五年)所収 九二頁。
- 32 三島由紀夫・三好行雄(対談)「三島文学の背景」『国文学』(学燈社 一九七〇年五月 臨時増刊号)所収 一一頁。
- 33 三島由紀夫・石原慎太郎(対談)「新人の季節」『文学界』(文藝春秋 一九五六年四月)所収 一二四頁。
- 34 松本健一「三島由紀夫 亡命伝説」(河出書房新社 一九八七年)八五頁。
- 35 野島秀勝 前掲書 一〇六頁。
- 36 磯田光一 前掲書 七四頁。
- 37 柄谷行人「同一性の円環——大江健三郎と三島由紀夫」『終焉をめぐる』(福武書店一九九〇年)所収 一三三頁。

(一九九〇年十二月六日受理)